

# 慶應義塾中国文学会第八回大会要項

開催日 2023年7月1日(土)

※ZOOMによる開催

## 慶應義塾中国文学会第八回大会日程次第

13:00 ZOOM 開場

総合司会：吉永 壮介（慶應義塾大学文学部教授）

13:30～13:40 会長挨拶 関根 謙（慶應義塾中国文学会会長）

研究発表

13:40～14:10 河南地域における全真教「太古棲雲門下」について

脇山 豪（東京大学大学院人文社会系研究科後期博士課程）

司会：酒井 規史（慶應義塾大学商学部准教授）

14:10～14:40 ラジオ番組表からみた在満日本人の文化生活

—関東庁時代の大連放送局を中心に

代 珂（慶應義塾大学商学部専任講師）

司会：杉野 元子（慶應義塾大学文学部教授）

14:40～15:10 清代の童養媳について—知識人家庭を中心に—

五味 知子（慶應義塾大学文学部准教授）

司会：山本 英史（慶應義塾大学名誉教授）

（休憩）

15:25～15:45 岡晴夫先生の著作の刊行について

岡晴夫先生著作編集委員会

講演

15:45～17:15 中国古典籍の序跋について

高橋 智（慶應義塾大学名誉教授）

司会：関根 謙（慶應義塾中国文学会会長）

総会

17:20～

# 研究発表要旨

## 河南地域における全真教「太古棲雲門下」について

脇山 豪（東京大学大学院人文社会系研究科後期博士課程）

本発表では、モンゴル帝国期から元代にかけて全真教の中で分派的な傾向を示していた「太古棲雲門下」の存在を提唱し、彼らが元朝の皇族、あるいは高級官僚と結びつくことによって河南地域に独自の権力を築いたことについて分析する。

従来、郝大通の門下は『諸真宗派総簿』に基づき「華山派」と呼称されてきた。しかしこれは後代の仮託によるもので呼称の妥当性を欠き、中国に於いては近年、郝大通-王志謹派の弟子に「盤山派」という呼称が用いられている。本発表で提唱する「太古棲雲門下」とは郝大通（太古）及びその高弟の王志謹（棲雲）の弟子筋といった意味である。この呼称は同時代史料に見え、後代の命名である「盤山派」より妥当性が高い。この一派に注目すべき理由として、太古棲雲門下の第四代領袖である孫履道が強く関連する。孫履道は全真教掌教が帯びる「管領諸路道教事」の職位を掌教就任以前から用いていたことや、「門下掌教」等、他の使用例が極端に少ない職位名を用いることから、教団中央から離れた権力を持っていたことが推察される。

これら「太古棲雲門下」の位置づけについて、「太古棲雲門下」を模倣したと思しき「靈隱真人門下」がオッチギン王家との結びつきによってその権力を盤石にしたことを参考に、「太古棲雲門下」と皇族、その周辺の官僚らとの結びつきから分析する。

キーワード 道教、全真教、モンゴル帝国、太古棲雲門下、孫履道

## ラジオ番組表からみた在満日本人の文化生活——関東庁時代の大連放送局を中心に

代 珂（慶應義塾大学商学部専任講師）

本報告は新聞紙のラジオ番組表に対する調査と分析を通して、在満日本人のラジオにおける文化生活を考察することが目的である。

満洲電信電話株式会社は複数の民族を対象に二重放送（第一放送日本語、第二放送中国語・その他の言語）という多文化放送事業の展開を目的とし、大連、新京、ハルビン、奉天を中心に全満放送網を構築した。二重放送に対する内容研究は主に中国語放送を中心に行われてきた。在満日本人のラジオ普及率が高かったにも関わらず、これまでの研究では日本語放送の状況および内容に対する考察は不十分だったと言わざるを得ない。その前提としてまず日本人が早期に移住しラジオの文化を形成した関東州大連の聴取状況を明らかにする必要がある。

上記問題意識に基づき、本報告は満洲電信電話株式会社が登場以前の関東庁時代の在満ラジオ放送を研究対象とする。1932年から1934年までの間に放送された演劇放送、語学講座、スポーツ実況などを通して在満日本人の文化生活を考察し、その上、この時期の放送は満洲国ラジオ放送の性格の形成にどう影響を与えたかを検討したい。

キーワード 満洲国、関東州、大連放送局、文化的コンテンツ

## 清代の童養媳について——知識人家庭を中心に——

五味 知子（慶應義塾大学文学部准教授）

童養媳は、将来息子の嫁とするために、結婚適齢期前に夫家に引き取られた女兒、またはこのような慣習を指す。沈從文の小説『蕭蕭』の影響か、日本においては、童養媳となった女兒は将来の夫より年上で、将来の夫の子守りをさせられるというイメージが強いが、実際に童養媳の事例を分析した先行研究によれば、童養媳の過半数が将来の夫より年下である。なぜなら、童養媳の本来の目的は、嫁の「青田買い」であり、嫁を娶るための費用（結納金や婚礼の費用）の節約のためだったからである。したがって、童養媳は貧しい庶民の家庭で頻繁におこなわれていた。知識人家庭でも童養媳が見られないわけではなかったが、そこには庶民家庭とは異なる事情があった。

本発表では、これまで注目されてこなかった清代の知識人家庭における童養媳の事例に焦点を当て、知識人家庭の女兒が童養媳に出された原因や、迎え入れられた理由について検討する。それによって、童養媳という慣習が知識人家庭において、家族戦略としてどのように用いられていたかを明らかにする。

キーワード 清代、童養媳、家族史